2019.1.20
No.211

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,500円）

2019　民主主義をとり戻す年に

2018.8月　黒岳石室で風に揺れるチングルマ

寒中お見舞い申し上げます。

読者からたくさんの年賀状ありがとうございました。１月も早半ば。北海道は連日の大雪と厳しい寒さです。雪は美しいですが毎日の雪かきに天を眺めて「お手柔らかに」と思わずつぶやいています。

新年早々に熊本で大きな地震があり、９月の北海道地震を思い起こしました。普段の備えと地域のコミュニティがとても大事ですね。地震大国の我が国に原発はいりません。一刻も早く全部の原発を廃炉にしてほしいです。

昨年１２月、政府は沖縄の辺野古に新基地を造るため民意を無視して、埋め立ての土砂を投入しました。琉球新報は２０１８年１２月１５日の社説で「歴史から見えるのは、政府が沖縄の人々の意思を尊重せず『国益』や『国策』の名の下で沖縄を国防の道具にする手法、いわゆる植民地主義だ。土砂が投入された１２月１４日は、４・２８（注：1952年のサンフランシスコ講和条約で沖縄が日本から切り離された日）などと同様に『屈辱の日』として県民の記憶に深く刻まれるに違いない。だが沖縄の人々は決して諦めないだろう。自己決定権という人間として当然の権利を侵害され続けているからだ」と述べています。

県民投票が行われるまで、埋め立て工事を止めるよう求めるホワイトハウスへの請願署名が20万筆を超えました。タレントのローラさんは「美しい沖縄の埋め立てをみんなの声が集まれば止めることができるかもしれない」と署名を呼びかけました。私もローラさんの勇気ある行動に感動し、署名しました。ロックバンド「クイーン」のブライアン・メイさんも「緊急！緊急！この嘆願書に署名して米軍基地の拡張により脅かされている美しいサンゴの海と、かけがえのない生態系を守ろう」と呼びかけました。

ローラさんは「芸能人が政治的な発言をするな」とバッシングされました。嫌な世の中ですね。メディアももっと、反対の声を伝えるべきだし、コメンテーターもおかしいことはおかしいと毅然と言ってほしいです。

辺野古への土砂投入は休むことなく続けられ1ヶ月が過ぎました。安倍総理、民主主義のルールを守ってください！

植村隆さんが櫻井よしこさんらを名誉毀損で訴えた札幌訴訟は昨年１１月９日に不当な棄却判決が下されました。３月２０日には、元東京基督教大学教授の西岡力氏と「週刊文春」を発行する文藝春秋を訴えた東京訴訟の判決が下されます。植村裁判取材チームによる緊急出版本「慰安婦報道『捏造』の真実検証・植村裁判」（花伝社）が出版されました。捏造したのは、植村さんを攻撃した櫻井さんと西岡さんでした。驚きの事実を明らかにした一冊です。是非読んで頂きたいです。札幌では年末から新年にかけて、何度も弁護団会議が開かれ、議論を重ねて、膨大な控訴理由書が作成されました。ご本人、弁護団、支援者で力を合わせて必ず勝利をと頑張っています。控訴審に対する公正な判決を求める署名を集めています。どうぞ読者のみなさまのご支援をお願いします。

2018.9月赤岳で花パトロール

昨年は、高山植物のパトロールなど山の自然を守る活動もしました。どうぞ今年もご愛読をお願いします。

「自由に、のびのびと生きていこうよ」と語りかける「パパラギソングコンサート」を楽しみました　～府中市

2018.12.17　府中市バルトホールで開かれたコンサート（写真はクッキングハウス提供

パパラギソング
CD完成記念
コンサート
人間の仕事
人間の仕事
人間の仕事

原発事故で何が起きたかを劇的に表現し、福島の事故がまったく収束していないことがひしひしと伝わってきて圧巻でした。
「朗読劇　線量計が鳴る　元・原発技師のモノローグ」中村敦夫著として本になりました。（而立書房　１０８０円）
原発の技術と問題点、被曝の危険性、福島第一原発事故の実態など、原発の基礎から今日の課題までを、分かりやすく伝えます。理解を助けてくれてお勧めです。

２０１８　みな子の山旅日記

８月１８日（土）黒岳

１ヶ月早く初雪が降った大雪山系の黒岳に高山植物のパトロールに行って来ました。雪に備えて、軽いダウンジャケットもザックに入れて行きました。雪は溶けていましたが９合目近くからは、吹き飛ばされそうな風で寒かったです。眺望はなし。夏のお花はほぼ終わっていましたが、ミヤマアキノキリンソウの黄色い群落（上写真）が見事でした。ウスユキトウヒレン、コマクサ、イワギキョウが懸命に咲いていました。

ウスユキトウヒレン

コマクサ

イワギキョウ

９月２日（日）樽前山

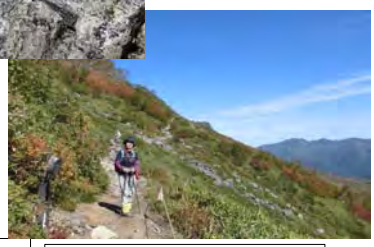
今朝は４時起きして、樽前山での山のトイレデーに参加しました。総勢６人です。
登山口の駐車場には６時半に着きましたがすでに満杯のため、道路脇に車を置いて、登山の身支度を整えて歩きました。快晴で朝早くから沢山の登山者で賑わっています。
支笏湖が美しく、夕張岳や 増毛連山、道南の駒ヶ岳なども見えました。山を美しいままでと、マナーガイドとティッシュを持ち帰る マナー袋を配布しました。

樽前山頂上で

９月13日（木）赤岳

北海道地震から一週間。天気は想定より良くなり、一日中の好天。5時半に友人に江別で拾ってもらい、銀仙台の駐車場を8時45分出発。第一花園の紅葉は少しくすんでいましたが、落ち着いた紅葉でした。私は地震の疲労もあって、山歩きがいつもに比べてスローペースでした。帰りは第一展望台付近で、ナキウサギのチュイッチュイッという鳴き声が愛らしく、歩く励みになり嬉しかったです。

左から間宮岳北鎮岳、凌雲岳（赤岳で）



高山植物のパトロール中の私

9月19日（水）旭岳

みぞれの裾合平

旭岳ロープウェーで中腹まで登り、そこから裾合平に向かって進みました。最後の高山植物のパトロールも兼ねています。ポツポツとアラレが降り出し、周りが白くなりだしました。やがて雷鳴も轟き、みぞれ。裾合平に到達せずに引き返し、姿見の池周辺を散策しました。噴気孔近くまでの散策路も開設されていて、迫力ある噴出音も堪能しました。翌日旭岳で初冠雪観測の記事がありました。

春 BOOKs

モンテレッジォ 小さな村の旅する本屋の物語

内田洋子著　方丈社1,944円

イタリアの山奥の村で生まれた本の行商が、出版社と書店をつなぐ出版取次業へ成長する歴史を追ったドキュメンタリーです。

内田洋子さんのこんな文章から始まります。「人知れぬ山奥に、本を愛し、本を届けることに命を懸けた人たちがいた。小さな村の本屋の足取りを追うことは、人々の好奇心の行方を見ることだった。これまで書き残されることのなかった、普通の人々の小さな歴史の積み重なりである。わずかに生存している子孫たちを追いかけて、消えゆく話を聞き歩いた。何かに憑かれたように、一生懸命に書いた」。（はじめにより）

ベネチアの古書店の店主から、先祖が本の行商人をしていたと聞き、その出身地であるトスカーナの小さな村モンテレッジォを訪ねます。

１９世紀初め、ヨーロッパは記録的な冷夏に見舞われ、村民たちは教会が発行するお札や暦を売り歩く行商を組織して村を救ったと言います。やがて出版社から売れ残った本を融通してもらい、１９世紀後半にかけてイタリア全土に行商するネットワークが作られたという。行商の帰りにお客が読みたがっている本の情報を出版社に伝えるようにもなっていくのです。

古書の行商をしていた先祖のことを語る人々のエピソードが楽しく、村の物語が本そのものでした。文章は臨場感があり、先祖から伝えられた物語に私も本の行商人と一緒に山を越えて旅した気分になりました。こんなに各地でたくさんの人々に、本が待ち望まれたなんて素敵ですね。

現在は個性的な本屋さんになっていますが、本の行商が暮らしを支えたのです。行商人は本の内容もきちんと把握して読者に伝えたというからすごい。そして家業が誇りになりました。本への感謝を込めて、最も読んで欲しい本に贈る「露天商賞」を創設、現在も毎年発表されているそうです。

イタリアの光や空気を感じさせる著者が写した写真もとてもいいです。モンテレッジォに、是非行きたいと今から夢見ています。

内田さんはイタリア在住４０年。イタリアのニュースを日本メディアに伝え、エッセイストとしても活躍しています。小学館の月刊PR誌「本の窓」に「感じるイタリア」を連載中です。

極夜行

角幡唯介著　文芸春秋社
1，890円

探検家の角幡唯介さんが８０日間、重いソリを引きながら相棒の一頭の犬と北極圏の闇の中を歩いた記録です。　２０１６年１１月。グリーンランド北西端のシオラパルクに着いたところから、真っ暗闇。何も見えない闇の世界を、二台のソリに１５０キロもの荷物を載せ、犬とさまざまな苦難を乗り越えます。氷河では２回もブリザードを喰らい、ツンドラでは六分儀を失い、月明りもなく暗黒状態で小屋にたどり着きました。しかし最悪の事態が待ち受けていました。１年半前にデポしていた食糧も、譲り受けたイギリス隊のものも白熊にすべて食べつくされていたのです。自分の探検は「終わった」と絶望します。

そこから命がけの探検に胸が躍りました。

角幡さんは「世界にもう未踏の地はない。だから人間社会のシステムの外側に出る活動が探検だと思う」と言います。ＧＰＳなどの文明の利器を使わず、わずかな月明りを頼りに、最小限の装備で北極圏を歩きました。地図とコンパスで位置を知るのですが、荒れた天候にも苦しめられるのです。食糧が尽きかけたときには、犬を殺すことも覚悟します。苦楽を共した犬への愛情も増し、人知れず涙ぐみます。

４ヶ月ぶりに見た太陽の光を角幡さんはこう表現します。「私の目には、まるで月と太陽に象徴される闇と光の二頭の巨獣が天空を舞台に取っ組みあっているかのように観察された。昇りつつある太陽の光は、着実に、あらかじめ決められていた仕事を粛々とこなすかのように極夜の闇を葬り去っていった」。見た人でなければ表現できない世界です。

最初から最後まで、緊迫感があり、「本当に生きて帰ることができるのか？」とドキドキしながらページをめくりました。

私も１０数年前、松浦武四郎が北海道を探検したころを想像しながら山岳会の仲間と、北海道中央分水嶺踏査に参加した日々を思い出しました。ある時、巨大な雪崩の跡を見た時の恐怖は忘れられません。

角幡さんは、極夜行のために４年前から数回偵察行を実施して、暗闇の中でも、道に迷わずに済みました。地図とコンパスの力を改めて教えてもらいました。

以前の探検と異なっていたのは、旅の準備中に結婚。娘の出産に立ち会った話から始まること。帰還が近くなると家族と衛星電話でたわいない話をする場面。家族の存在が角幡さんを支えたことに意外性があり面白かったです。2018年の大佛次郎賞を受賞。

ノモレ

国分拓著　新潮社　1，７２８円

南米ペルーのアマゾン川の奥地で出会った文明と接触したことのないの民「イゾラド」の謎を追いかけたノンフィクション。著者はＮＨＫディレクターで、２０１６年にNHKスペシャルとして放映されました。その時の取材をもとに描かれたノンフィクション。

本書は教育を受けた先住民のリーダー、イネ族のロメウの視点で描かれます。

ロメウの先祖に伝わる百年越しの「再会の約束」が作品の軸にあります。１９０２年、ロメウの曾祖父が、入植者の白人が経営するゴム農園で奴隷にされ、そこから逃げる際に、森のなかで仲間と生き別れになったという話から始まります。逃げ切って故郷に戻った人の中にロメウの曽祖父がいました。森に逃げたまま消息の分からない人々を「ノモレ（仲間、兄弟）」と呼び「「探してほしい」という願いを残して世を去りました。

ある日、人里に現れたイゾラドが、村を襲撃する事件が起きますが、ロメウは彼らを「ノモレ」と信じイゾラドの家族と交流を続けます。たくさんのバナナを与え続け、簡素な言葉を聴き取ります。ロメウの一途に彼らを仲間だと信じ続ける姿に感動しました。

獲物が取れない雨季の時だけ、森を離れてアマゾン川近くに降りてくるのを繰り返し、ロメウからバナナを受け取っていましたが、アマゾンの観光船の白人たちから、たくさんのカメラを向けられるようになり、森の奥地から二度と来なくなってしまいます。あのとき、おなかが大きかった少女は無事に子どもを生んだろうか？と気にかけるロメウのやさしさに「ノモレ」の思いがあふれていました。

あとがきに「先住民には私たちとは違った時間が流れている」と書きました。国分さんは、「明日のことは語らず、１００年後や千年後の未来ついて語る。そんな未来を信じようとする人を書きたいのだ」と語ります。

同じ地球上に住んでいながら、こんな世界がいまだにあるとは驚きでした。ペルー先住民の一途な思いが尊く、文明に毒されずに生きていてほしいと思いました。

追悼　石牟礼道子
毒死列島　身悶えしつつ

石牟礼道子　田中優子　高峰武
宮本成美　著　金曜日1,080円

『苦海浄土 わが水俣病』などの作品で知られる作家の石牟礼道子さんが２０１８年２月１０日に亡くなりました。「週刊金曜日」立ち上げ時の編集委員でもあった石牟礼さんと現編集委員の田中優子さんの対談を中心にブックレット化。

田中優子さんは、学生時代に自我の文学「と言われた近代文学に共感できず、江戸文学研究者となりました。石牟礼さんの世界観に相通じるものをずっと感じていたといい、石牟礼さんは「近代的な自我をいうようになってから人のことを考えなくなった」と批判しています。水俣病が発生する前から水俣には独自の文化がありました。チッソの経営者たちは患者さんたちの身悶えを感じ取れないのは、目先の利益しか考えないからだ。石牟礼さんの母は病気で畑に行けないとき「草によろしう言うてください」と近所の人にことづけしました。集落では徳の高い人がいて、近所で悲嘆にくれるようなことがある家があると、何もできなくても「悶えてなりと加勢する」と。でもチッソは駆け付けることさえしなかったと語ります。水俣の風土と、人も動物も、植物も、魚も生命の共同体だという世界の豊穣さを石牟礼さんは書き続けてこられたことに、私たちが、いつの間にか失ってしまったことの大切さを教えられました。

麦酒（ビール）とテポドン
経済から読み解く北朝鮮

文聖姫（ムン・ソンヒ）著
平凡社新書　907円

文聖姫さんは東京植村裁判で、事務局を担い親しくしています。昨年の秋には韓国を訪れ、一緒に韓国民主化の歴史を学びました。

文さんは在日２世であり朝鮮総聯機関紙の朝鮮新報元記者から研究者に転じ、最近、朝鮮籍から韓国籍に移したという異色の経歴を持ったジャーナリストです。記者として、研究者として１５回に及ぶ訪朝で北朝鮮の市場経済化の波をつぶさに見てきました。もはや厳格な社会主義計画経済ではなく、経済の市場化が止まらない北朝鮮。農民市場や工場などの実態を通して、等身大の姿を描くルポです。

北朝鮮の経済がどん底だった90年代後半、庶民はトウモロコシのお粥を食べてしのぎました。それでも、一つの弁当を分け合い、助け合って生きてきた人々の姿に胸が熱くなりました。マツタケ売りの若者たちは、ホームレスに食べ物を分ける姿もありました。

２０１０年代になると、地域市場以外にキルゴリ市場があります。（キルゴリとは路上のことで闇市を指す）現地ではメトゥギ市場と呼んでいて、メトゥギはバッタの意味。取り締まりの対象ですが、飛んで逃げる様子がバッタに似ているからつけられたあだ名。ところが２０１２年ごろから取り締まりに抗議して売り続ける人も増えたのだとか。チンデゥギ（ダニ）市場に変わったと言います。たくましさを象徴する代名詞というところがいいですね。農村も変わりました。圃田（ほでん）担当責任制が導入され、協同農場内の農

地を受け持つ単位は少人数になり、実質的に社会主義革命前の個人農に近いというルポも目からうろこが落ちました。
文さんの心のふるさとというスポットが平壌にあります。大同江（テドンガン）ビール工場に隣接するビアホール。平壌特派員時代、ここの生ビールを愛飲し、週に１００本まとめ買いしては案内員や運転手と飲み、来客に振る舞っていたという。研究者になってからは新しくできた慶興館（キョンフングァン）というビアホールに通いました。つまみはスケトウダラの干物。美味しさが伝わります。ビールのスピード普及の背景にビアホールがあるといいます。労働者の憩いの場としてとても人気があります。缶ビールも販売されるようになり、北朝鮮政府はアメリカへの輸出を考えていたようですが、制裁で、他の食料品も含めてすべての輸出が禁じられています。
「北朝鮮は、テポドンに象徴される核・ミサイル開発か、『平和の象徴』である大同江ビールの輸出かを国際社会から迫られているのだ」。（本文から）祖国に対する愛着を持ちながらも、その行く末を冷静に見つめる姿に共感しました。今後どこまで市場経済化が進むのだろうか？北朝鮮の庶民の暮らしが生き生きと語られ、こういう本がもっと普及すれば北朝鮮のイメージも変わると思いました。お勧めです。

Cinema Graffiti

自由に自分らしく
生きたいに共感

『ボヘミアン・ラプソディ』
樋口　みな子

札幌映画サークル会報シネアスト2019年1月号掲載

イギリスのロックバンド「クイーン」の軌跡とボーカルのフレディ・マーキュリーの人生が語られます。今年はフレディ没後27年になります。
映画は、1970年代の結成当時から85年にあった20世紀最大のチャリティー音楽イベント、ライヴ・エイドまでを描いています。フレディを演じたのはラミ・マレック。フレディを見事に体現しました。
ＳＮＳや、新聞、テレビでも話題になり、映画は連日満員の盛況です。私もクイーンの音楽とフレディの声の美しさと表現力の素晴らしさにはまったひとりで、3度観ました。『ボヘミアン・ラプソディ』のCDを買い、毎日聴いています。
ライヴ・エイドでのフレディの背中から始まり最後も同じシーンで終わりますが、背中が最初と最後ではまるで違って見えました。
ロンドンの飛行場で働きながら、ロックバンドに入りたいと、ライヴハウスに通い詰めるフレディ。仕事場で「パキ野郎」と蔑まれもします。フレディはペルシャ系インド人で、暴動でイギリスに家族で逃げてきたのです。移民であり敬虔なゾロアスター教の家庭で育ちました。映画の前半で当時の社会の偏見や差別、古い価値観に抵抗するフレディが描かれます。少し出た歯が強調されていますが、本物の容姿は決して悪くはないと私は思うのですが。
バンドを探していたフレディは当時の「スマイル」と出会い、歌を披露し、メンバーに加わり、奇跡の歌声で世界を魅了していきます。
僕の愛せる人はどこかにいないかい？と歌う「愛にすべてを」でクイーンに心を鷲づかみにされました。フレディの歌声はより切々とより強い願望をもって聴こえます。神への祈りを歌うゴスペルで、ブライアンのギターとクイーンのコーラスも素晴らしい。ロックの常識を超えています。
移動用のワゴンを売ってレコーディング代を作り、時間の許す限り何度もレコーディングを繰り返す彼ら。この時のシーンが好きです。ティンパニにコインを乗せて叩いたり、ギターアンプを振り子のように揺らしたり、ピアノの鍵盤の上にビールやらタンバリンやら乗せたりと、革命的な音を楽しむ姿が描かれます。
山の中のレコーディングスタジオを貸し切って制作して、しかも締め切りを過ぎて出来上がったのがフレディの代表曲「ボヘミアン・ラプソディ」です。オペラの要素を大胆に取り入れ、多重録音という斬新なアイデアで作り上げた壮大な曲は大ヒットします。
メアリーにバイセクシャルだと打ち明けたことで彼女との距離が少しずつ離れていき、フレディは成功の裏で激しい孤独感にさいなまれていきます。フレディの個人マネージャーであるポールとの関係がクイーンとの亀裂を生み、ソロ活動の道を選びます。ポールはフレディを独り占めしようと、メアリーの大事な電話も取り次ぎません。しかし、メアリーの苦言でフレディは「クイーンが家族」だとやっと気が付くのです。
アフリカの飢餓を救うためのチャリティコンサート「ライヴ・エイド」のステージに立ちたい。その時すでにエイズに侵されていて自分の死が近いことを知っているのです。クイーンに「私が何者かは私が決める」「同情なんかしないでくれ」と告げる言葉にジーンとしました
ライヴ当日、披露する楽曲の歌詞がフレディの魂の叫びのように７５０００人の会場に響き渡ります。ライヴ・エイドの伝説的な２１分が当時のままに再現されました。日本語の字幕があって理解を助けてくれました。先日、私もIMAXでライヴの臨場感をたっぷり味わいました。
「ボヘミアン・ラプソディ」を歌う瞬間、メンバーが顔を合わせ安堵する場面に思わず涙しました。かなり複雑な構成になっているので、是非、聴いてください。フレディの才能のすごさに圧倒されます。「ママー」と歌いはじめると物語が始まり、一気にステージは盛り上がります。フレディの出生であるイ

ンド人のファルーク･バルサラという名を捨てて音楽の道に行くため、別人になったフレディ本人を指したことだと言われている楽曲だそうです。「ママ、ううう　あなたを泣かせるつもりじゃなかった　もし僕が明日のこのときに戻らなくても」という詞を知り、病に苦しむフレディと重なりました。

クライマックスの「伝説のチャンピオン」で俺たちはみんなチャンピオンと歌いあげます。フレディの苦難の人生を表し、そして虐げられてきたマイノリティを表現したとされる曲と言われています。人生を振り返るかのような歌の数々に魂が揺さぶられ、涙があふれました。紆余曲折を経てようやく大事なものを見つけたフレディの決意表明ともいうべき素晴らしいライヴを最後に物語は幕を閉じます。

美しい旋律、コーラスやオペラなど多様な音楽を取り入れた、今までのロックとはまるで違うロックに魅了されました。ラスト、フレディの絶唱「ショウ・マスト・ゴー・オン」にはこんな詞があります。

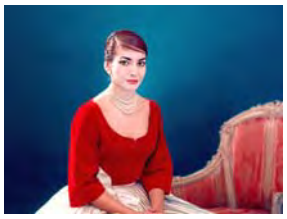
My soul is painted like the wings of butterflies.
Fairy tales of yesterday, grow but never die.
I can fly, my friends.
僕の魂は蝶の羽のように彩られ
過去のおとぎ話は 語り継がれて
終わることはない
僕はまだ飛べるんだ わが友よ

移民、難民問題、外国人労働者への不当な低賃金差別、LGBTといった問題は、今の時代も共通しています。当時よりむしろ息苦しくなっていると感じます。

世界中から賞賛されているときも、自分のアイデンティティとは何か？と苦しみ、いつも包んでくれるような愛を求め続けた、フレディの人間性と、自由に自分らしく生きたいと願い歌ったフレディの心の叫びに共感しました。

クイーンの音楽、フレディの歌は今聴いても少しも古くなく新鮮です。

私は、マリア・カラス　トム・ヴォルフ監督



トム・ヴォルフ監督が３年かけて、マリア・カラスの未完の自叙伝や手紙４００通を入手。プライベート映像や未公開の音源などで編集したドキュメンタリー。

ソプラノ歌手が舞台で歌い上げる生の映像と音源を繋げて構成し、オナシスへの切ないラブレターなどの朗読がユニークでした。彼女の歌声を通して人としての喜びと悲しみ、怒りや後悔が、リアルに伝わってきました。そこには知られざるマリア・カラスの姿がありました。ひとりの女性として、愛を求めながら傷つくマリアの人生が詞のように語られました。

歌姫としての成功とさまざまな苦闘もありました。ローマ歌劇場での公演では、のどを痛め一幕だけで降板。チケットは完売していたため、メディアからは「ごう慢だ」と激しいバッシングを受けました。またオナシスは米大統領ケネディの未亡人ジャクリーンと結婚。その事実を彼女は新聞紙面で知るという衝撃もあります。

人生のストーリーに、圧倒的な舞台での歌唱が素晴らしい。「清らかな女神よ」「歌に生き、恋に生き」などカラスの人生まで歌いこんだオペラ・アリアがたくさん聴けて楽しめました。

ぼけますから、よろしくお願いします。

信友直子監督・撮影・語り

信友さんは長くドキュメンタリー番組を制作してきました。故郷の広島県呉市で父、良則さんと暮らす母、文子さんの異変に気が付いたのは５年前でした。

診察で認知症と診断され、老いた父が介護することになります。現在、文子さんは８９歳。良則さんはは９８歳です。

信友さんは45歳で乳がんが見つかり、落ち込む娘をユーモアあふれる愛情で支えたのが母でした。そんな母の助けにより、人生最大の危機を乗り越えた信友監督は両親との思い出づくりのため、父と母の記録を撮りはじめます。しかし、信友さんは母の変化に少しずつ気づきはじめ、２ヶ月ごとに東京から帰省して、家事を手伝いながら撮影しテレビで放映しました。追加取材、再編集を加えて１本にしたのが本作です。

二人は介護サービスを嫌がりました。料理上手で、社交的だった文子さんが、いろんなことを忘れて家事ができなくなり、「死にたい」「私を邪魔にしている」と暴れます。良則さんが「プライドが高すぎるんじゃ」と怒る場面も包み隠さず写します。家事など一切したことがなかった良則さんが包丁を握るシーンにはいいご夫婦だなぁと思いました。

私の母も９３歳になりました。記憶力も計算も得意、料理上手でしたが、何を食べたのかも忘れるようになりました。つい母だとむきになってしまいますが、この映画で老いを受け入れながら二人で暮らせる幸せもあるのだなぁと温かい気持ちになりました。父を見送るまで元気だった母に思いをはせることができました。

家へ帰ろう

パブロ・ソラルス監督

ホロコーストから生き延びた８８歳のアブラハムが友人との約束を果たすためアルゼンチンから祖国ポーランドに旅するロードムービー。

頑固なアブラハムは老人ホームに入る前日、家族に内緒でポーランドに向かいます。７０年間、音信のない親友に、彼が仕立てたスーツを渡したいと。

しかし、過酷な体験からポーランドとドイツという言葉を口にしないアブラハムは先々で人々をてこずらせます。スペインまでは飛行機ですが、パリからドイツを通らないでポーランドに行きたい彼を助けたのはドイツ人の人類学者、目的地近くまで車で案内してくれた看護師など、行く先々で出会った女性たちでした。

悲惨な場面が出るわけではありませんが、どれほどの迫害であったのかがアブラハムの語りで、過去の歴史に向き合う人たち。少しずつ心を開いていくアブラハムが魅力的でした。主演のミゲル・アンヘル・ソラの頑なさと、それがかすかに解きほぐれる瞬間の表情も素晴らしい。７０年前と同じたたずまいのウッチの街にたどり着けた喜びにジーンとしました。

藤原智子監督　追悼上映会に向けて

戦争、飢餓、疫病・・・悲惨な歴史の果てに辿り着いた日本国憲法。外国人から“世界の希望”とまで称えられる憲法が、他でもない日本の内側から、土台を食い荒らすシロアリの脅威にさらされています。憲法の砦たるべき国会は自ら役割を放棄し、民意は至る所で無視され、瀕死状態に陥っています。

こんな今、私たちが思い起こすのは映画監督・藤原智子さんです。情熱のすべてを傾けてドキュメンタリーの傑作群を残し昨年６月、亡くなられました。私ども札幌映画サークルは過去３度も藤原作品を上映し監督に来札していただきました。中でも『ベアテの贈りもの』『シロタ家の20世紀』は、会員がいま改めて見たい映画のトップに挙げています。

『ベアテの贈りもの』は少女期を東京で過ごした若きアメリカ女性がGHQに入り、無謀な戦争の惨禍を二度と招かず、人々が差別や抑圧のない社会に暮らせるようにと、理想に燃えて14条と24条の草案を書いた物語。『シロタ家の20世紀』は彼女の父であり日本でも活動した世界的ピアニスト、レオ・シロタとその一族が、ユダヤ人ゆえにナチスの迫害にさらされた、何十万もあったホロコースト家族史のひとつを、あらゆる資料と現代に残る証言の数々で浮き彫りにした稀有な記録です。

問い合わせ、申し込みはsapporocinema@yahoo.co.jp又はy-oozeki@gc4.so-net.ne.jp
携帯　090-2875－8362　（大関）
　　090-6870-9225（樋口）

上映会は２月２４日（日）札幌プラザ（中央区南２条５丁目）です。チラシを同封しました。是非ご覧ください。

『ベアテの贈りもの』　１０：３０　１６：１０
『シロタ家の２０世紀』１３：３０　１８：００
講演　清末愛砂さん「憲法を語る」
　　１２：１０　１５：１０

上映会企画の経緯　　大関裕美子

藤原智子監督

東京での「お別れの会」（９月）に参加して３ヶ月。あっという間に上映会と進みました。監督死去（86歳没）の知らせを友人・知人に知らせるうちに、互いに「追悼上映をしようよ」と話し合うようになり、私も実現したい気持ちになりました。

「お別れの会」では、藤原作品7本のダイジェスト版（４５分）が流れ、その後は懇談となりました。監督の創作意図は、「知らされないで過ぎた事を知りたい。例えば、自身が経験した学童疎開。戦後５０年が過ぎて、あの時代自分たちが経験したことは何だったのか？」と謎を解いていくような映像でした。

札幌に戻ると、会員のNさんから「追悼上映作品は決まったのか？上映するなら『ベアテの贈りもの』を観たい。憲法を勉強したい」と言われました。さらにその続編ともいえる『シロタ家の20世紀』を上映しようと決まりました。この２作品は、憲法９条と２４条に関わっています。

講演は清末愛砂さん（室蘭工業大学大学院准教授）にお願いしました。専門は憲法学、家族法です。忙しいところ快く引き受け頂きました。タイムリーな企画だと言われて、後援団体が20団体集まりました。「今、観るべき映画だ！」と言われています。たくさんの方たちに観ていただきたい作品です。皆さんどうぞ楽しみにご覧ください。

みな子が選ぶ２０１８映画ベストテン

外国映画①:1987.ある闘いの真実②ボヘミアン・ラプソディ③.ペンタゴン・ペーパーズ④スリー・ビルボード⑤シェイプ・オブ・ウォーター⑥否定と肯定⑦タクシー運転手　約束は海を越えて⑧判決ふたつの希望⑨アリー　スター誕生⑩運命は踊る

日本映画①万引き家族②カメラを止めるな③焼肉ドラゴン④空飛ぶタイヤ⑤羊と鋼の森⑥日日是好日⑦ナミヤ雑貨店のキセキ⑧一陽来福⑨8年越しの花嫁　奇跡の実話⑩きみの鳥はうたえる

購読料と寄付をありがとうございます（敬称略）
2018.12.5～2019.1.18

助田梨枝子/安田成男/梅沢俊/秀嶋ゆかり/齊木登茂子/山川陽一/吉根由紀子/阿保亘/小池修生/坂井恒俊/蓬田三枝子/水野スウ/太田肇・朋子/河原麻代/鈴木訓/長澤恵子/新妻徹/野村保子/久野真紀子/近美千代/反橋一夫/木村玲子/室田トモコ/塩川哲男/安川誠二/高橋儁/川原茂雄/高橋春江/小林嘉則/黒木沙会子/黒尾和久/加藤多一/細田伸昭/近藤啓子/益子美登里/渡邊圭/柴田和子/有田美江/宮森多恵子/小澤登美栄/清水俊子/中村京子

計106,500円は2年分の方、ご寄付も含まれています。印刷と送料に使わせていただきます。また北嶋節子さん、高澤光雄さん、文聖姫さんから著書の寄贈がありました。合わせてありがとうございます。